

第5章 ペラ州における青年期女性の進路形成と自己同定 —追跡面接調査の質的分析—

第5章 ペラ州における青年期女性の進路形成と自己同定

—追跡面接調査の質的分析—

本章では、第1次・第2次調査と同一の母集団からサンプルを選定し、実施した第3次追跡面接調査（2003年12月下旬～2004年1月上旬）の結果を示すことによって、青年期女性の進路形成過程における受容と葛藤（以下「自己同定」）の多様なあり方を明らかにする¹。

第4章では、第1次調査の結果を生徒の声により補完した第2次面接調査（2002年8月下旬～9月上旬）から、後期中等学校的女子生徒の進路形成意識について明らかにした。第3次調査の目的は、後期中等学校を修了した後に、青年期の女性自身が、現実を選択した進路や予想される生涯設計についてどのように自己同定しているか、明らかにすることである。調査の対象は、後期中等学校修了後に何らかの教育・訓練機関に進学した、あるいは就職した青年期の女性である。追跡調査という形をとることによって、人生の一時点における進路選択という観点からだけでなく、より長期間の進路形成や生涯設計という観点から、マレーシアの女性の意識や態度を検討する。また、第1次調査と第2次調査においては、進路形成に強く影響を及ぼす要因として性役割観を中心に分析してきたが、第3次調査では、性役割観以外の要因も合わせて分析する。

以下では、第3次追跡調査の概要を示し（第1節）、調査の結果に基づき、マレー人女性と華人女性の進路形成のありようを5つの型に分類しそれぞれの特徴を明らかにする（第2節）。そして、青年期女性の進路形成に及ぼす要因を整理するとともに、各要因や進路形成に対する女性自身の自己同定のあり方についてその特徴をまとめる（第3節）。

第1節 第3次調査の概要

第2次調査時に、後期中等学校の最終学年（フォーム・ファイブ）である調査対象者は、様々な進路展望を描いていた。しかしながら、1年半を経た第3次調査時には、各々の希望通りに進学できた生徒ばかりではなかった。抱いていた進路展望と現実とのギャップを目の前にした女性は、自らの進路形成や予想される生涯設計に対して、どのような気持ちを抱き、どのように自己同定しているのか。本章では、マレーシアの青年期女性の進路形

成過程における自己同定の問題について、ペラ州での第3次面接調査の言説分析と類型化によって明らかにする。なお、調査対象者は、既に後期中等学校を修了しているため、本章においては青年期女性と呼称する²。

ペラ州の後期中等学校生徒を対象にした第1次・第2次調査を通じて、エスニック集団別、男女別に進路分化していること、エスニック集団内部でも進路展望が学校種別に分化していること、進路分化の背景には性役割観が少なからず影響を及ぼしていることなどが明らかにされた。続く第3次調査追跡調査のテーマは、「女性の進路形成をめぐる受容と葛藤—華人を中心とした追跡調査—」である（2004年1月4日～1月16日実施）。第1次・第2次調査においては、後期中等学校のフォーム・ファイブ生徒を対象としたが、第3次追跡調査では、第1次・第2次調査から1年半を経た、後期中等学校修了生7人（当時17歳～19歳）を対象とする。それらの対象は、中等後教育機関あるいは高等教育機関、教育・訓練機関に進学する（した）か就職した女性であり、第1次・第2次調査と同一の母集団から選択した。

第3次調査の概要

テーマ：「女性の進路形成をめぐる受容と葛藤」

目的： 後期中等学校を修了した青年期女性が、自らの進路形成を受容および葛藤しているか否かについて検討する。

方法： 面接調査（個人・半指示的面接法）

日時と場所：2004年1月4日（月）～1月16日（金）（2003年12月18日～1月18日）
学校外（家やカフェなど）

対象： 第2次調査で面接調査をした女性 7人（括弧内実施日）

※【 】内は、第1次・第2次調査に基づく分類。

【葛藤型】	マレー人女性（マムナール、文系、教員志望）	→技術学校（1月8日）
【葛藤型】	マレー人女性（マムナール、理系、特に希望なし）	→工場勤務（1月8日）
【受容型】	華人女性（マムナール、文系、私立カレッジ希望）	→希望通り進学（1月10日）
【葛藤型】	華人女性（パイクン、理系、フォーム・シックス希望）	→希望通り進学（1月15日）
【受容葛藤型】	華人女性（パイクン、理系、マトリキュレーション希望）	→希望通り進学（1月16日）
【受容葛藤型】	華人女性（パイクン、理系、マトリキュレーション希望）	→希望通り進学（1月16日）
【受容葛藤型】	華人女性（パイクン、理系、マトリキュレーション希望）	→希望通り進学（1月16日）

調査項目（マレー人女性・華人女性 共通）

- 1) 第2次調査時の進路展望と実際の進路のギャップはあるか否か。
- 2) ギャップを生じさせる要因は何か。どのように作用するか。
- 3) 実際に選択した進路についてどのように自己同定しているか。

第3次面接調査の、主な調査項目は次の通りである。青年期女性の進路形成と自己同定について、(i) フォーム・ファイブ時に女子生徒が描いていた進路展望と、中等学校修了後に女性が選んだ実際の進路とにギャップがあるか否か、(ii) ギャップがあるとするれば、そのギャップを生じさせる主要な要因は何であり、どのように作用するか、そして(iii) 実際に選択した進路について、女性がどのように自己同定しており、その上でどのような生涯設計を描いているかについての3項目である。

第1章で概観したように、マレーシアにおいては、後期中等学校を修了した後に、次の幾通りかの機関に進学することが可能である。公立大学に進学を希望する場合は、フォーム・ファイブを修了した後に、フォーム・シックスか、マトリキュレーション・コースに進学する。フォーム・シックスは、マレーシア上級教育証書(STPM)を管轄するマレーシア入試評議会によって運営される大学入学資格試験のための準備課程であり、フォーム・シックス修了後に受験するSTPMの結果によって、あらゆる大学への進学が可能である。一方、マトリキュレーション・コースは、各大学で運営される大学入学を許可された予備課程であり、各大学の入学要件を満たすためのコースが提供される。さらに、私立大学や私立カレッジ、教員養成カレッジやポリテクニクも、中等学校修了後に進学可能な機関である。特に、1996年の規制緩和によって、私立高等教育機関には、従来の中後教育機関にあたる私立カレッジの他に、企業が設立した大学や海外の大学の分校などが含まれるようになった。それによって、私立高等教育機関数が増加し、その在学者数は増加の一途をたどっている³。

調査に先立ち、青年期女性の進路形成について、第3章で用いた学校種別による階層分類と、各エスニック集団に特有の自己同定のあり方と予測される進路によって5つの型に分類した。その自己同定のあり方は、実際の進路をほぼ受け入れている場合(受容型)、強く葛藤している場合(葛藤型)とその中間の場合(受容葛藤型)から成る。

この分類作業から、第3次調査における対象は、マレー人女性の2つの型と華人女性の3つの型に分けられる。まず、(a) マリム・ナワール中等学校から、学業成績が芳しくないために「女性らしい」進路を選ぶ、下層のマレー人女性(葛藤型)と(b) タッサ州立宗教学校から、政府の人材育成策により理系への進学を促されてきた中間層のマレー人女性(受容型)である。次に、ペイ・ユエン中等学校から、華人であり女性であるという2つの属性により、「二重の差別」を受ける可能性を有する中間層の華人女性の内、(c) フォーム・

シックスに進学する華人女性（葛藤型）、(d) 同じくペイ・ユエンから、マトリキュレーションに進学する華人女性（受容葛藤型）、そして、(e) マリム・ナワール国民中等学校から、華人の下層であり、華人らしい進路を選択しようとする華人女性（受容型）である。

以下が、上記の5つの型をまとめたものである。

(i) マリム・ナワール中等学校

(a) **葛藤型** マレー人下層→就職、教員養成コース

(e) **受容型** 華人下層→私立カレッジ

(ii) ペイ・ユエン中等学校

(c) **葛藤型** 華人中間層→フォーム・シックス

(d) **受容葛藤型** 華人中間層→マトリキュレーション

(iii) タッサ中等学校

(b) **受容型** マレー人中間層（上部）→マトリキュレーション

なお、マリム・ナワール出身の調査対象者には、他校出身の調査対象者との比較・対比の可能性を考慮して、マレー人や華人の中間層（下部）ではなく、より葛藤が強いと推測できる下層の対象者を選択した。

第2節 青年期女性の進路形成と自己同定の5類型

1. マレー人女性の葛藤型と受容型

(1) マレー人女性の葛藤型

マレー人女性の事例は、葛藤型、受容型という2つの型に分類可能である。まず、マレーシアで最も学校数が多く、一般的な学校種別である国民学校のマレー人女性は、経済的な制約により中等教育後の選択肢が狭められることにジレンマを感じる「葛藤型」である。マレー人女性の葛藤型は、母親が学校教育を受けたことがない点、父親が夕方早い時間に家にいる点など、低い階層に特有の傾向を示す。また、教員養成カレッジに進学し、「女

性に適する」職業として教師になることを希望している。それは、教師が半日出勤するだけで家事も育児もできるという性役割観に基づく理由だけでなく、大学進学よりも短い年限で就職できるという経済的理由も大きい。教員養成カレッジ以外のもう一つの選択肢として、フォーム・シックスにも進学することは可能であるが、フォーム・シックスで2年を費やしても、2年後に公立大学に進学できるか否かは確約されてはいないために、マレー人女性の葛藤型の多くはそれを断念する。経済的に貧窮する場合には、教員養成カレッジをも断念し、技術訓練校に進学したり工場で働いたりすることになる。

①マレー人女性葛藤型 A さん

マレー人女性Aさん⁴は、親戚に教師が多く、自らの性格にも教師が合うと考えていた。またフォーム・シックスに進学しても、その後大学に入ることができるかどうかという見通しが立ちにくいために、第2次調査のフォーム・ファイブ時から教員養成カレッジに進学することを希望していた。しかし、マレーシア教育証書 (SPM) 試験が、「食べるに足る (cukup makan)」程度の成績でしかなかったことから、第3次調査時には技術学校の短期コースに通いながら、教員養成コースを受講する機会をうかがっている。以下では、Aさんのプロフィールと面接日程などについて示した後、第2次調査（学校と家庭）と第3次調査（家庭他）の結果の概略を紹介する（以下同）。

【第2次調査（2002年9月4日）】

Aさんは、カンパールで生まれ、タパー (Tapar) で育った。そして、初等学校はトゥアラン・スカッ (Tualang Sekah)、中等学校はマリム・ナワールに通った。第2次調査時には、Aさんとの個人面接の翌日 (2002年9月5日) に、マリム・ナワール中等学校まで歩いて20分ぐらいのところにあるタマン・ビナ・ジャヤ (Taman Bina Jaya) という新興住宅地の自宅に家庭訪問して家族にも面接した。第2次調査当時から、父親が学校の用務員として勤めていたため、面接には家族そろって協力してくれた。母親は、「結婚したら出て行くのだからそれまでは一緒に住みたい」として、全寮制学校など家から遠い学校に進学することには反対したため、Aさんは家から通学できる近接する普通学校に通うこととなったそうである。

《進路展望》

この学校（マリム・ナワール国民中等学校）を選んだのは、父親が用務員をしていることが大きい。その他に、家から近いこと、兄もこの学校に通っていたことも理由となっている。将来は教師になりたいから卒業後も勉強を続けたいと思う。親戚にも教師は多く、性格的にも教師は合っていると思う。そのために、フォーム・シックスに進んで、大学に入ってから教師になることも考えられるが、そうすると長い期間待たなければならない。（フォーム・シックスに進んでも）大学に入ることができるかどうかははっきりしないから、卒業後は教員養成カレッジに入りたい。確かに大卒の教師の方が給料はいいが、長い期間待つことよりは、教員養成カレッジに入った方がいいと思う。両親は教師になることもいいが、工場で働くのもいいと思っていて、大変な努力が必要で費用がかかるような職業には就いて欲しくないと思っている。

《性役割観》

家の主（ketua rumah）として、物事の価値判断が的確でなければならないので、男性が高等教育を受けることは必要である。高等教育を受けないと職業機会が狭まってしまい、あまりいい職業に就くことができないと思う。女性の方は、夫がお金持ちであれば、主婦になることも可能なので（性役割に）「賛成する」を選んだ。（伝統的性役割に対しても）女性が台所で働かなければならないのは昔（zaman dulu）の話で、今は変化している。教育レベルが高いのに主婦になると、それまでに費やしたコストを捨ててしまうことになる。

《リーダーシップ》

マレー・コミュニティの間では、女性がリーダーになることも可能だと思うので（男性どちらがリーダーに適しているかは）「分からない」を選んだ。その他の場所に関しては、もはや変えることができないと思う。概して、男性の方が様々な障害や問題に耐えることができるし、女性よりも感情的ではないので（リーダーになるのに）適している。

《職業観》

教師は男女とも適していると思う。弁護士は義務を果たすことができ、話すのがうまいので男性に合う。女性は真面目なので秘書や、優しいので看護師がいいと思う。

《差別》

母親がどちらかと言うと弟の方をかわいがりがちだ。でも父親は私の方をよりかわいがってくれる。どちらかと言えば、両方とも私の方の面倒をみってくれるかもしれない。多分私の方が弟よりもよく勉強するからかな。

時々学校で民族的な確執がある。この前はマレー人と華人の男子生徒の間でけんかがあった。こういうことは時々ある。マレー人の中では通常男子の方を重んじる傾向にある。マレーシア社会で起こる事は多すぎて答えることができない。

第2次調査時にAさんは、固定的性役割観を持っており、女性特有の進路として「教員養成カレッジ」に進学することを希望していた。そして、家族との面接の際には、Aさんの進路希望に対して、家族の理解もあることをうかがい知ることができた。マレー人女性に特有とされる進路展望を描いていたのである。では、実際に、Aさんはどのような進路

を選択したのであろうか。

【第3次調査（2004年1月8日）】

第3次調査に先立ちアポイントをとった際に、Aさんの父親は学校から2時半に、Aさんは17時か18時に帰宅すると聞いたため、帰宅時間に合わせて家を訪ねる。両親、母親の妹とその子ども（対象者の姪）と兄も、面接に居合わせる。第3次調査時には、母親47歳、父親50歳、兄23歳、本人19歳である（2004年1月現在）。なお、面接途中で帰宅した兄は工場で働いており、マレーシア教育証書試験（SPM）を受験していないとのことである。

《進路の現実》

現在、ゴペン（Gopeng）のマラ技術学校（Kemahiran MARA）に通っている。毎日6時に起きてコースに出かける準備し、7時20分にはバスに乗る。8時にゴペンに就き、5時ぐらいまで勉強する。家に帰ってからは11時30分に寝る。

裁縫コースの6ヶ月コースを2回受講して、だいたい1年間通う予定で、2月にはコースが修了する。その後は、非常勤の教師に応募して結果を待つ予定。最近は、教師に申請している人が多いので、すぐになれるかどうかは分からない。もちろん教師になるためには、専用の養成コースを受けないといけない。申請が通るためには、経験（pegaraman）と技術（kemahiran）が必要。もし教師になれず、長く待たなければいけないようであれば、まずは工場での仕事を探す。

（マリム・ナワールの生徒に人気がある進路は）多分、フォーム・シックスが一番で、次が技術学校、最後に就職。フォーム・シックスに入ることができたとしても、STPMの後に、ディプロマやサーティフィケートを得ることができかどうか分からない。2年も待って、駄目だったら怖いから行かなかった。技術学校に通って、IPT（高等教育機関）にも行きたいから申請し続けるつもりだ。

第2次調査時に教員養成カレッジに進学することを希望していたAさんではあるが、第3次調査時には、マラ技術学校に進学し裁縫コースを受講していた。Aさんは、「教師になるために専門の養成コースを受けないといけないが、その申請が通るためには、経験と技術が必要。なかなか教師になれず、長く待たないといけないようであれば、工場の仕事を探す」予定とのことである。このように、教師になるために進学を希望しているものの、第2次調査時よりもその困難を感じているため、SPMの「食べるに足る」程度の成績と親の希望とを加味して、できるだけ早く収入を得るために工場で働きたいとも思っている。

両親は、「何でも本人のやりたいようにすればいい（suka hati）」と言っているが、近所に住み頻繁に行き来するAさんの叔母は、「主婦以外で、女性に合うのは教師」と断言す

る。Aさんは、第3次調査時にも高等教育進学に意欲を見せていたが、実際にマリム・ナワールの生徒が、フォーム・ファイブを修了した後に想定される進路は、フォーム・シックス、就職、技術学校などであり、高等教育機関（Institut Penggajian Tinggi: IPT）に進学することができるケースは稀である。そのため、Aさんの高等教育機関への進学は困難であるとも予測できる。

さらに、Aさんの今後の進路展望と生涯設計は以下の通りである。

《進路展望》

華人は理系に多く、SPMの後にカレッジに行く人が多いが、マレー人は政府関係の学校に進むという違いがある。男性は就職、女性は勉強という違いがあると思う。男子はお小遣いをほしがるけれど、女子は特にお小遣いをそれほどほしがる訳ではないし、それよりは勉強を続けたいと思うから、男女の違いが出ると思う⁵。

友達の中にはカンパーの工場で働いている人もいるし、私立カレッジに行っている人もいる。私立カレッジに行く場合は、政府のローン（たとえば pinjaman MLBJ）を借りる。フォーム・シックスに進んだ友だちもいる。もしこの後、カレッジに行く機会があったら、美術教育（pendidikan seni）を選びたい。

（多くのマレー女性が教師になりたがっている理由を聞くと）たとえば警官に女性になるとちょっと粗雑なイメージがあつてあまりよくない。それに対して、教師は、時間的に余裕があり子どもを育てやすいなど、他の仕事よりもメリットが多い。それは誰かに言われたと言うよりは、自分でそう思うようになった。

《生涯設計》

結婚は、いつするか分からないが、今は昔とは違う。叔母が言うように仕事があればいつ結婚してもいい。結婚相手は、家族の背景（性格がいいかどうか）、宗教、経歴（kerjaya）なんかが大事。「食べるのが十分」というだけではだめ。（最近女子の方が、教育レベルが高いが・・・と聞くと）自分は相手の教育は気にならないけれど、男子の方が気にする。子どものことは分からない。

Aさんは、進路展望に性別・エスニック集団別の相違を認めている。実際に、マリム・ナワールで一緒に学んだ華人の友人の進路と、マレー人である自らの進路が異なることを認識しているためである。また、男性とは異なる女性らしい進路があると考えるために、Aさん自身も教師を希望し続けている。

また、Aさんは生涯設計において、結婚する時期は特定していないが、結婚相手については高い理想がある。子どもの数を回答する場面で、叔母が「マレーだと2人や3人だと少ないと言われるから、9人でも10人でもいい」と笑いながら口を挟むと、母親が、「それは、お上が言っているだけだから」と反論する一幕も見られた。母親が、結婚は「出会うや相性（Jodoh）が大事だ」と言い、一同うなずき共感する場面も見られた。

このように、マレー人女性の葛藤型Aさんの、第2次調査時に描いていた進路展望と、第3次調査時に歩んでいた実際の進路が異なっていた。こうしたギャップには、メリトクラティックな要因以外に、経済的要因が進学阻害要因として作用したと言える。Aさんの進路形成過程にはこれら幾つかの進学阻害要因が作用しているため、第3次調査当時(19歳)に希望していた進路と現在進んだ進路にギャップがあり、幾分葛藤しているようであった⁶。

②マレー人女性葛藤型Cさん

同じくSPMで「食べるに足る」成績を取め、Aさんと似通った境遇にあるCさん⁷である。母親が「マレー人はすごく成績がよければ勉強を続けるチャンスは幾らでもある。だから、進学できないのは本人のせい」と厳しく断ずる点が、家族の理解があるAさんとは異なると言える。ブミプトラ政策の恩恵を受けて、マレー人は成績さえよければ奨学金を得て高等教育機会を獲得することが、他のエスニック集団に比べて比較的容易であるとされる。それゆえ、「家が貧しい」ことを希望通りに進学できないことの原因とみなすことは必ずしもあたらないとされる。また、マレー人であるために優遇されているにもかかわらず、高等教育に進学する機会を得ることができなかったCさんに対して家族は理解を示さないため、本人も強い負い目を感じている。以下では、Cさんのプロフィールと面接日程などについて示した後、第2次調査(学校と家庭)と第3次調査(家庭他)の結果の概略を紹介する。

【第2次調査(2002年9月2日)】

Cさんは、テロツ・インタンで生まれ、初等学校の途中まではスリム・リバーで暮らしていた。初等学校の6年生になってから、マリム・ナワールに引っ越し、マリム・ナワール中等学校に進学した。これまで、「家族と一緒に住む方がよかったので」全寮制学校やその他の学校に進学せず、普通学校に通学した。家は、「最貧困層開発計画(Projek Pembangunan Rakyat Termiskin: PPRT)」の一環として、政府が最貧困層の家庭に対して住居を提供する特別地区内にある。

《進路展望》

中等学校を選ぶ際にスリ・カンパー(Seri Kampar)の宗教コースも候補にあったが、コストがかかるので行くことができなかった。それは、父親の意見による。私は、6

人兄弟の一番上で、下の兄弟姉妹の面倒を見る必要がある。将来は、父親が「自分で稼いだお金は自分で使っている(guna duit sendiri)」と言っているので働く。もちろん勉強を続けることには興味があるが、今は経済的な状況から仕方がない。希望する職業は、会計 (akauntan)。” akauntan” という言葉が小さい頃から好きだった、それが理由。もちろん高い地位であることも理由の一つ。誰かと進路について話すことはほとんどないが、時々なら母親と話す。議論するというよりは、自分でどうしたいかを言うと、母親が意見を少し言ってくれる程度だ。

《性役割観》

高等教育を受けなくても職業的地位が高ければ、よい夫や父親として十分に務まると思うので、高等教育に進むより、男性は就職する方が重要だと思う。女性も、夫の仕事の悩みに役立つような知識を持つために高等教育に進学した方がよい。それだけでなく、経済的に夫を助けるために仕事をするのもよい。だから、女性が家事だけをする必要はない。それでも、家事も女性にとって重要。だけど必ずしも仕事をやめる必要はない。

《職業観》

女性は決断をするのがあまり得意ではないし、考えることが男性よりもうまくないので男性が指導者になった方がいいと思う。弁護士は決断する勇気、ビジネスはより多くの時間が必要なので男性に適している。一方、女性はあまり難しくない職業である講師や、やさしく患者を労わる必要がある医者などに向く。(自分が希望する) 会計の仕事は簡単な仕事なので男女ともに合うと思う。

《差別》

マスメディアによって差別があると伝えられるが、実際に差別だと感じるような事象を見たことがないのでよく分からない。

第2次調査時に、フォーム・ファイブのCさんは文系クラスの学級委員を務めており、しっかりとした意見を持つ、非常に話しやすい生徒であった。成績も悪くないと思われたが、後期中等学校修了時には就職することを希望していた。性役割観を認めているが、女の子だからと言うジェンダー要因よりは、家族を養うためや家族に経済的な負担をかけないためという経済的要因が、Cさんの進路選択には作用しており、進学することを断念することを本人が予期していた。

しかしながら、本人と面接した2日後(2002年9月4日)に家庭訪問した際には、家族からは異なった意見が聞かれた。Cさんの母親は、マレー人は「すごく成績がよければ勉強を続けるチャンスは幾らでもあるので、進学することができないのは本人のせい」ときっぱりと断じたのである。マレー人は、成績さえよければ奨学金を得て高等教育を受けることができるため、Cさんが言っていた「家が貧しいから」という経済的理由は必ずしもあてはまらないと考える。そして、Cさんの両親は、高等教育に進学することには全く反対していなかった。それゆえ、Cさん自身が言っていた親の意見によるというよりは、C

さん自身の成績次第で、進学できるか否かが決まるというのが現実であったとも解釈できる。Cさんは、「毎日深夜の0:30ぐらいまで勉強する」と言うものの、実際には本当に「勉強しているかどうかは分からない」というのが親の見解であり、高等教育機関に進学するために必死になって勉強するという姿勢を見せていないため、「できることなら会計の仕事に就きたい」という本人の希望はなかなか実現できないとも推測できた。

ところが、Cさんが、「勉強はとても大事。勉強しないと仕事を得ることができない」と意識しているのは、母親自身が公教育を受けることができなかったので、教育がどれほど重要かを身にしみているからであった。また、Cさんも両親も、「教育に性別は関係ない」、「学問するのに男女は関係ない」、「もし成績がいいのなら大学に行ってもいい」と男女の特性や役割観に基づく教育観は有していないようであった。

第3次調査時に、Cさんは実際にどのような進路をたどったのであろうか。

【第3次調査（2004年1月8日）】

第3次調査に先立ってアポイントメントをとるべくCさんの自宅に電話すると、母親から「仕事に行っているので、15時半まで戻らない」ことを告げられた。その後再度電話し、Cさんとは自宅で1年半ぶりに再会することになる。第3次調査時に訪れた際には、Cさんは工場に勤務しており、1年半前とは随分と雰囲気は違っていた。Cさんは6人兄弟で、その内2歳になる末子とCさんだけが女子で、その他は男子である。兄弟は、上からフォーム・ファイブ、フォーム・フォー、フォーム・ワン、初等学校3年生である。Cさんによると、一番下の弟が「勉強ができる」そうである。第3次追跡調査時には、祖父（居間に寝ている）、父親・母親と兄弟、従妹が家にいた。父親は、現在も魚を釣って、生計を立てており、母親は専業主婦で、結婚後に働いた経験はなかった。家には、テレビ・VCDプレイヤーなど電化製品が一通り揃っており、一続きの居間の奥には台所があり、従妹が筆者に料理をふるまってくれた。居間に続いて部屋が2つ（子ども部屋と寝室）あるが、掃除しているところだとして入室できなかった。

《進路の現実》

SPMの結果は、「食べるに足りる (cekup makan)」程度だった。奨学金をもらえるほどよかった訳でもない。

朝5時半に起きて、身支度し、6時半にはカンパ行きのバスに乗る。7時には仕事（工場のオペレーター）場に着く。11時に一度休みがあるので、その時朝ごはんを

食べる。再度仕事に取り掛かり 3 時半に少し休憩。昼食は、4 時過ぎに家に帰ってからとる。6 時に水浴びをして、8 時ごろテレビを見るなどして休み、10 時頃には床につく。時々、友だちと約束をして 6 時ごろに会うこともある。工場では、16 歳ぐらいから 30 歳を超えたぐらいの人が働いている。ただ、自分と同じ年頃の子と友だちになる。

小さい時は先生になりたかったが、弟や知り合いに何かしら教えてもすぐ怒ってしまってあまりうまく教えることができなかった。気性が激しい (garang) ので、多分先生には向いていないと思う (母親も同じことを言う)。他に警察や消防士になりたいと思ったこともあったけど、喘息ですぐに病気になってしまうからそれもだめだと思った。

《進路展望》

まだ勉強を続けたい意志はある。フォーム・シックスにも進学しようと思えばできたかもしれないが、その後のSTPMで希望するところに入れなかったらと思うと怖くて入れなかった。フォーム・シックスに進んだ友だちと、カンパー行きのバスで一緒になることがある。その子は、ビジネス関係の教科書を持っていた (から、フォーム・シックスではそういう実務的な分野を学ぶと認識している様子)。

(だが、以前面接した時は働きたいと言っていたがと聞くと) あの時は、仕事をしたことがなかったから仕事は簡単だと思っていた。でも仕事を始めた今は勉強の方が簡単だと思う。前はあんまり考えてなかった。勉強するのはあんまりストレスがたまらないからいい。

今日も友だちとしゃべっていたがカレッジに行きたい。建設業に興味があるので、たとえばスランゴールにあるティームール技術カレッジに行きたい。ディプロマをとるためにコストがどれだけかかるか分からない。でも、まだ後一年あるので、お金を貯めたい。仕事を始めた今も、別に男女の差別は感じないし、見たこともない。

C さんも、A さんと同様に SPM の結果が「食べるに足る」程度の成績であったため、奨学金を得て進学することはできなかった。フォーム・シックスに進学してから、高等教育機関に進学するという選択肢もあったが、その後の STPM の成績があまり芳しくないことを予測すると「怖くて」選択できなかった。工場の仕事を始める前までは働くことを希望していたが、工場の仕事を始めてからは勉強したいと感じるようになった。できれば貯金して、技術カレッジに進学したいと考えている。だが、現実化しようとしていると言うよりは、現実逃避のために進学を希望しているようにも見受けられた。

第 3 次調査時に、母親は、「もっといい仕事についてほしい。工場よりもっといい仕事に」と C さんに対する希望を述べるとともに、「ディプロマを取得しても、工場にしか勤められないのだったら進学しても意味がない」と、教育と雇用とのミスマッチについても触れる場面もあった。C さん本人は、「勉強を続けたい」と思うが、コストの問題がネックになっていると考えている。このように、第 3 次調査時においても、C さんが経済的要因により葛藤しており、進路に対する本人と親の考えとに相違がある点も、第 2 次調査時と

は変化していない。

Cさんの今後の生涯設計は以下の通りである。

《生涯設計》

今ボーイフレンドは特にいないが、23歳から25歳ぐらいで結婚できたらいい。知り合いに18歳ぐらいでもう結婚した人がいて、(その知り合いを見ていると)しなきゃいけない仕事(tangun jawab)が増えて遊べないみたい。18歳なんてまだ若い。若いのに遊べないなんて…。

たとえば性格やふるまいがよい人で、仕事が(地位と給料面で)よいこと。(教育はとたずねると)学があっても仕事がなければ意味がない。熱心に仕事をして十分食べていけて、慈しんでくれる(cahaya kesayagan)人がいい。

第2次調査時の中等学校在学中と異なり、第3次調査時にCさんは少し話にくい雰囲気感を漂わせていた。それゆえ、十分なコミュニケーションをとれたとは思わないが、両親が席を外すと、第2次調査時のように少しずつ打ち解けて話してくれるようになった。

第2次調査時のCさんの進路希望は曖昧であったため、第3次調査時に就職していたことが、第2次調査時の希望通りとも希望とは異なっているとも言えた。また、第3次調査時には、今の仕事に満足している訳ではなく、できれば勉強を続けたいと思っていることを何度も繰り返したが、何らかの教育機関に進学するために努力しているというわけでもなかった。なお、後期中等学校修了後にSPMの結果が公表されてから、クラスや学校で集まることがなかったため、他の友人の進路についてあまり把握していなかった。

このようにマレー人Cさんは、経済的要因が最大の進学阻害要因となっており、工場で働いている現状には十分に満足していない。マレー人女性Cさんは、Aさんと境遇が似通っているながら、その葛藤の度合いは、前出のAさん以上であるとも言える。2人の葛藤の度合いが異なる理由は、本人の希望と親の希望とが類似しているか相違しているかという点に求められる。Aさんは、親の考えに沿う進路を選択しようとしているが、Cさんは親の希望を知らながらそれに従おうとはしておらず、何か具体的な行動を起こそうとする意欲もあまり高くはない。つまり、エスニック集団別、階層別だけでなく、親の意識との相違が、進路形成の自己同定に及ぼす影響は大きいと考えられる。以上がマレー人女性の葛藤型の2例である。

(2) マレー人女性の受容型

もう一つのマレー人の型は、全寮制宗教学校タッヤに多い型である。自らの進路を抗うことなく受け入れているため「受容型」と呼ぶが、マレー人女性の受容型の事例とは第3次調査時に接触することができなかった。その理由は、受容型の多くは、既に地元（ペラ州）を離れて大学のマトリキュレーションに進学しているケースが多く、対象者へのアクセスに制限があったからである。

受容型として想定したタッヤ出身の女性は、ペラ州の全域から集まっており、その大半は中間層以上の家族出身である。また、父親の教育だけでなく、母親の教育が他の学校出身者に比べて格段に高い。性役割観にしたがって行動することを、ムスリマ（イスラームの女性）のあるべき姿として理解しているが、性役割観が固定的であることを受け入れない女性も多い。そして、マレーシアで「エリート・コース」の一つとされる公立大学のマトリキュレーションに進学することが一般的な進路となっており、大学卒業後は、経済状況に応じて、家庭での役割に負担がかからない程度に、よりよい職業に就きたいとも考えている。第2次調査時に、マレー人の受容型は、大学学部で法学や医学など権威ある分野を専攻し、後期中等学校修了時には医師や弁護士、科学者など比較的地位の高い職業に就くことを望んでいた。

このように学業達成度が高く、一見選択肢が多いかのように見える受容型ではあるが、マレーシア政府が、経済開発過程で理系の人材育成に力を入れたことが影響して、本人が望むと望まざるとに関わらず理系への進学を勧められてきている。ただし、工学系分野への進出は未だ多くはない。たとえ固定的性役割観には反対していても、夫が仕事をやめるように勧めたり、子育てに時間を割く必要があったりすれば仕事をやめることも厭わないと断言する。つまり、高等教育機関に進学したとしても、その高い学歴を卒業後の社会的成功に結びつけるか否かは、受容型の女性にとって重要とは限らないと推測できる。このように、マレー人受容型の女性の進路形成には、ジェンダー要因とエスニシティ要因が影響を及ぼしていると考えられる。

2. 華人女性の受容型と葛藤型、受容葛藤型

(1) 華人女性の受容型

華人の事例は、調査を始めた当初（2001年）には受容型と葛藤型を想定していたが、第3次調査（2004年）に想定していなかった受容葛藤型を含めた、受容型、葛藤型、受容葛藤型の3つの型を挙げることとする。

まず、マリム・ナワールの華人女性に典型的な型として、「受容型」を挙げる。経済状況により選択肢が制限される上、華人というエスニシティ故に、マレー人ほど公立大学のマトリキュレーションに進学する機会が開かれていない。固定的性役割観には反対し、経済的要因とエスニシティ要因により選択の幅が狭められるが、早い時期から希望と現実との折り合いをつけながら、「華人らしい」進路を選択してきたため「受容型」と呼ぶ。後期中等学校を修了した後に私立カレッジに進学し、マレーシア社会で華人が多いとされてきた会計学や、産業構造の変化に伴い新しく多くの華人が専攻するようになった情報通信分野などを選択する。フォーム・シックスに進学することも可能な成績を収めているが、マレー人の葛藤型と同様に、フォーム・シックスで費やす時間の長さに見合った結果が得られないことを危惧して、私立カレッジを選ぶ。

以下では、華人女性受容型のGさんの事例を見てみたい。

①華人女性受容型Gさん

華人女性受容型のGさん⁸は、第2次調査を実施したフォーム・ファイブ当時から、私立カレッジの会計学コースを希望していた。両親は、Gさんの将来を考えて、フォーム・シックスを経由してから大学に進学することを勧めた。だが、Gさん自身は「もし2年後に大学に入れなかったらと思うとあまり自信がなくて、フォーム・シックスには進むことができなかった」と言う。また、首都クアラ・ Lumpur の私立カレッジに行くほどの経済的余裕もなかったため、第3次調査時には、地元の私立カレッジに通っていた。Gさんは、実践的な科目が豊富な私立カレッジに通っていることに対して満足しているようであった。

以下では、第2次調査時の面接調査を振り返ることとする。

【第2次調査（2002年9月3日）】

マリム・ナワールの華人生徒である G さんは、1985 年にイポーで生まれ、3 歳の時にカンパーに引っ越してきた。6 歳でメソジスト初等学校に入ったが、中等学校ではマリム・ナワールに進学した。17 歳の時に 3 ヶ月ほど家を離れてクアラ・ルンプール (KL) で販売のアルバイトをしたことが、両親と離れて暮らした唯一の経験である他は、カンパーとペラ州最大の都市であるイポー以外に行くことはほとんどない。第 2 次調査時に、文系では一番成績がよいクラスにおり、当時からフォーム・ファイブの後に進学することを希望していた。

《進路展望》

学校まで徒歩で 15 分と家から近く、交通手段を使う必要がないからマリム・ナワールに行くことにした。卒業後は進学したい。両親が自分自身のためにも高等教育に行った方がいいと薦める。まだはっきりと決めていないが、私立カレッジに行って、会計学を学びたいと思っている。今、コンピューターセンターでインド人の先生にコンピューターを習っている。将来は、会計士になることに興味があるけれど、まだはっきり分からない。進路については、父や母、友人やおじ・おばと話す。カレッジに行くことは両親も賛成してくれている。周囲の友だちも、KL のカレッジに行くと思う。

《性役割観》

オープンマインドになることができるから、男性は高等教育に行った方がいいと思う。固定的性役割観には「反対」。女性も男性と同様に働くことはできる。もし夫が仕事をやめるように言っても続けたい。

《リーダーシップ》

家とマレーシア社会では男性がリーダーになるのに適している。でも学校とコミュニティは分からない。学校は校長先生が女性だし、生徒も男女一緒だから。コミュニティでは商売をする時、何でも男女は一緒なのでこちらも分からない。

第 2 次調査時から、マレー語でのインタビューにも、言葉を選びながら丁寧に説明しようと心がけてくれており、前向きでまじめに勉強する様子が伝わってきた。まだ、進路について十分決めかねているようであったが、将来はクアラ・ルンプールの私立カレッジに進学した後に、性別関わらずに仕事を選びたいと考えていた。両親も、高等教育機関に進学することが、G さん自身にとってプラスになると助言していた。

第 2 次調査時には、G さん本人との面接の翌日 (2002 年 9 月 4 日) に自宅を訪ねた。G さんの家は、学校から車で数分・徒歩 15 分ほどの場所のマリム・ナワール中心部に、隠れ家のような雰囲気居を構えていた。第 2 次・第 3 次調査の対象者の中でも、比較的質素な家のたたずまいであった。

家庭訪問しての面接調査という機会ではあったが、祖母や母親に対しては筆者のマレー語があまり通じず意思疎通を図ることが難しかったため、あまり多くの質問はできなかった。Gさんを介した話によると、母親は新聞を読むことができるが書くことはできないことに不便を感じているため、日頃より子どもの教育は何よりも大事だと思っている。母親が特に注意しなくても、Gさんも弟もよく勉強するため、特にGさんは優秀な成績を収めていた。母親は、将来の進路に男女の別はないと思っており、私立カレッジに進学を希望するGさんに理解を示していた。父親は朝の6:00から18:00まで工場で働いているため、第2次調査時には不在であった。祖母が一人いるが高齢であり、面接調査中にはリクライニングチェアに座ったままであった。壁には、マレーシアに移住してきた当時の家族の写真が飾られている。

【第3次調査（2004年1月10日）】

第2次調査から1年半が経過した後、Gさんと再会することとなった。何度か携帯電話のショートメールサービス（SMS）で連絡をとりあった後、ホームステイ先からバスに乗り⁹、Gさんが住むマリム・ナワールを再び訪れた。1年半ほど経って、久しぶりに再会したGさんは、以前よりも大人っぽくなっていた。第3次調査時は、土曜日の午前中ということもあり父親が在宅しており、最初の内は、2回も家に来る見知らぬ日本人である筆者に対して不信感を抱いているのが、父親がインタビューに聞き耳を立てているようでもあった。第2次調査と同様に、祖母、母親、弟（当時フォーム・トゥー）も家にいた。筆者自身が体調不良のためインタビューがうまくいくか少々不安である中、少々よそよそしい雰囲気の中でインタビューは始まった¹⁰。

《進路の現実》

今行っている学校・学部は、シェン・ジャイ (Shen Jai) カレッジの商業学部 (School of Commerce) で、2年のアカウントコースを受講している。4月にはもう1年になるが、学校の勉強はいまだに難しく大変。平日はだいたい6時に起きて、6時25分ぐらいまでに準備を済ませ、6時半のバスには乗って私立カレッジに行く。7時半に学校で朝食をとり、8時から2時ぐらいまで授業を受ける。授業が終わったら家には4時か4時半までには帰る。帰ってからは水浴びした後、食事したり勉強したりする。以前行っていたコンピューター教室の講座は既に終わっていて、今は通っていない。夕方だいたい5時半から6時半ぐらいにはテレビを見て過ごし、8時に夕飯を食べた後はまたテレビを見て自由に過ごす。9時半か10時ぐらいには床につく。

（以前KLに行きたいと言っていたと伝えると）母親がKLはお金がかかるので駄目

と言った。SPMの結果はよくて、数学やマレー語、英語など5科目が通った。
フォーム・シックスは、もし2年後に大学に入れなかったらと思うとあまり自信がな
くて進むことができなかった。(今思うと)カレッジの勉強はフォーム・シックスよ
り実践的でいい。難を言えば、バスの乗客が帰りにいっぱいなことぐらいかな。(友
だちたちを見ていて)男子も女子もマレーも華人も、進路にあんまり差がないと思う。

Gさんは、第2次調査時に希望していた通り、私立カレッジに進学していた。SPMの結果は悪くなかったが、母親の希望と経済的理由から、フォーム・シックスではなくカレッジを選択することにした。将来の進路展望と生涯設計は次の通りである。

《進路展望》

両親が大学に進むとより高い給料を得ることができると言って薦めたが、大学に行く
ことにはあまり興味がない。将来の夢は今も変わっていない。両親は女の子を大切に
すると思う。最近物騒だから。

もっと勉強して、将来はアカウントかスチュワーデスになりたい。アカウントの仕事
は、(会計士など高度な仕事ではなく)普通の仕事があればいいと思う(おそらく希望の会計係などの意味)。

《生涯設計》

結婚は26歳ぐらいでしたい。今いるボーイフレンドはやさしくて、自分のことをよく
かわいがってくれる。彼はSPM後に、天井を作る仕事に就いている。あんまり相手の
仕事が何かということは気にならない。将来も彼のような人と結婚できればいいと
思う。

Gさんの第2次調査時の進路展望と、第3次調査時の実際の進路とに大きな隔たりは見られず、私立カレッジに進学している現状を受け入れているようだった。第2次調査時に、親は大学に進学することを勧めていたが、Gさん自身はあまり興味なかったため、親も強いることはなかった。将来希望する職業は幾らかあるが、特に、華人に特有の職業の一つである会計(士)が有力な候補のようである。その後の生涯設計も明確である。

以上から、Gさんの進路形成に作用する要因として、エスニシティ要因と経済的要因とを挙げることができる。Gさんは華人であるがゆえに、エスニシティ要因による負の影響を受けても現状に葛藤しないでいられるのは、早い時期から「華人らしい進路」を希望していたためであると解釈できる。また、Gさんは、経済的要因の影響によりフォーム・シックスに進学することを躊躇したが、そうした考え方は、エスニシティの枠を超えて、マレー人葛藤型のAさん、Cさんの考え方とも共通している。

(2) 華人女性の葛藤型

次は、華人がマジョリティであるペイ・ユエンに多い「葛藤型」である¹¹。私立カレッジへの進学を経済的に負担であるとみなし、中等学校修了後にフォーム・シックスで少し時間をかけてでも、公立大学に進学する機会をねらう型である。華人女性の葛藤型は、経済的要因により選択を狭められるだけでなく、華人というエスニシティ故に、SPMの結果によってマトリキュレーションに入るためには求められる基準が高くなってしまったため、中等学校修了後すぐにマトリキュレーションに進学する機会を得ることが大変困難である。そのため、やむをえずフォーム・シックスに進学するが多い。フォーム・シックスでは、1年後に迫るSTPM試験に向けて勉学に励むが、STPMの成績が優秀でなければ、結局は華人が多い私立カレッジや私立大学のトラックに進むことになる。このように、様々な要因により直面せざるをえない現実に対して葛藤する型である。

以下では、華人女性Hさんの事例を紹介することとする。

①華人女性葛藤型Hさん

華人女性の葛藤型Hさん¹²は、SPMの結果こそ優秀であったが、華人に対する選抜基準の高さゆえに、マトリキュレーションに進学する機会を得ることができなかった。そして、我が身にふりかかるエスニック集団間の教育格差という現実について「もう仕方ないと言うか、変えることのできない現実」とみなしていた。Hさんには、私立カレッジに進学するという選択肢もあったが、親の勧めで「授業料が安く、後に大学に入る可能性も残っている」フォーム・シックスを選択した。フォーム・シックスの間は、午前中に授業を受け、午後は遅くまで塾（チューション）に通うという忙しい日々を過ごすことになった。

【第2次調査（2002年8月22日）】

Hさんは、1985年に生まれてから今までカンパーで生活してきており、家の近所にあるペイ・ユエン中等学校に進学した。17歳でSPMを受験し、18歳にスリ・カンパールのフォーム・シックスに進学した。第3次調査時には、公立大学に進学するべく勉学に励むこととなる。宗教は仏教で、一日2回のお祈りを欠かさない。ペイ・ユエンの生徒の大半は仏教徒で、少数ではあるがキリスト教徒もいる。

《進路展望》

ごく家から近いところに学校があるので、この学校を選んだ。他に理由はない。できれば、フォーム・シックスに入った後にマラヤ大学に行きたいと思っている。大学卒業後は（女性に適した仕事である）薬剤師になりたい。

《性役割観》

教育レベルが高いと経済的に安定し生活が向上するので、男性も女性も高等教育を受けた方がいい。必ずしも男女役割が適しているとは限らない。もし女性に力があれば、必ずしも主婦になる必要はない。でも、両親は時々「女の子は本を読む必要ないよ (tak payah baca)」と言うことがある。

《リーダーシップと性差別》

自分の家では、既に父親がリーダーシップをとることが普通になっているので、男性がリーダーに適していると思う。それでも自分に機会があればリーダーになって力を試してみたい。

《差別》

ほとんどない。両親の発言も特に差別とは感じていない。華人の間では、いつも男女差別がある。両親によって、男性の方がかわいがられることが多い。多分華人文化の影響もあるだろう。また、男性の方が指導力を持っており、将来的にも指導力を持つようになることが理由であるだろう。

第2次調査中には、インタビューが授業中にさしかかってしまったため、ごく短時間の面接であった。Hさん自身は固定的性役割観には反対であるが、家庭では、親の男子と女子に対する扱いが異なっていたようである。それゆえ、家庭で差別がないとしながらも、時折Hさん自身の家族に話が及ぶと性差別的な状況があることに不満をもらしていた。Hさんは、第2次調査時には、フォーム・シックスを経て、マレーシアで入学することが最も難しいとされるマラヤ大学に進学することを希望していたが、第3次調査時に、実際にどのような進路を歩んでいるであろうか。

【第3次調査（2004年1月15日）】

第2次調査から時間が経っていたので会えるかどうか不安だったが、電話で連絡すると、1年半前にインタビューしたことを覚えてくれており、話はスムーズに進んだ。フォーム・シックスの授業が終わった後に2つの塾に行った後、18時過ぎに会うこととなった。Hさんは、約束の時間から10分ほど遅れて待ち合わせ場所に到着した。筆者と会うことは特に親には話していないらしい。

《進路の現実》

SPMの結果は9Aと決して悪くはなかったのに、ゴペンなどのマトリキュレーションに入るよう申請したが機会を得ることはできなかった。(9Aをとっても入れないことに疑問だと筆者が尋ねると)自分でも何が理由か分からない。

毎日朝6時に起き6時半に朝食を食べ、7時には学校に行く。学校はスリ・カンパールのフォーム・シックス(ペイ・ユエンからフォーム・シックスに進む生徒のほとんどがこの学校に行く)に通っている。午前中の授業が終わると、1時には家に帰る。学校からは歩いて帰ることもあるし、父親に送り迎えしてもらうこともある(居住している場所は、ペイ・ユエンからごく近いところにある。カンパールのバスステーションから歩いて20分から30分である)。

月曜日から水曜日までの塾は1つだけだが、それ以外の曜日は2コマ選択している。今日(木曜日)は2コマの日なので、6時ぐらいに塾が終わると家に帰って晩御飯を食べたり、テレビを見たりして過ごし、だいたい10時か11時に寝る。

土曜日などは8時ぐらいに起きて、8時半に朝ごはんを済ませる。1時にはバスに乗って、イポーのチューションセンターの3時からの授業に間に合うようにする。授業は6時ぐらいに終わるので、またバスに乗って8時頃までに家に帰る。その後は平日と同じように過ごす。イポーにはだいたい1週間に2回ぐらい行く。

フォーム・シックスに進まず、私立カレッジに行くこともできたかもしれないが、授業料などが高すぎたので両親も薦めなかった。両親は、授業料が安くて大学に入れる可能性もあるからと、フォーム・シックスに入ることを薦めた。(入る前から)自分でもフォーム・シックスが大変なのは分かっていた。STPMが今年の11月に迫っているが、UMやUSMに入るのに、数学や理科の点数が重要。フォーム・シックスから大学に入ることができる可能性は、印象では10人中5人強ぐらい。

Hさんは、SPMの結果はよかったが、希望通りにマトリキュレーションに進学することはできなかった。面接後にホームステイ先の友人(前期中等学校教員)によると、たとえ最もよい成績であるAが多くても、Aを取ることができなかった科目が数学や英語など主要な科目であると、マトリキュレーションに進学することができない場合があり、そうしたケースにHさんがあてはまると推測できる。そして、Hさんには、フォーム・シックスと私立カレッジという少なくとも2つの進路の選択肢があったが、両親の勧めによりフォーム・シックスに進学することとした。両親は、フォーム・シックスの方が私立カレッジよりも授業料が安く、大学にも進学できる可能性があることを理由として推薦したようである。

進路の男女差については、第2次調査時には「両親が女の子は勉強しなくてもいい」と言われたことがあると言っていた。第3次調査時には、「今でも少しそのように言うこともあるけれど、ほとんどなくなった」と述べた。また、「たしかに、兄の方を少しかわいがる場所がある。でもそういう言い方をするのはもっと年代が上の人だと思う。男性と女性の差はほとんどない」とも述べていた¹³。今後の進路展望は以下の通りである。

《進路展望》

大学に入ることができるなら、マラヤ大学やマレーシア理科大学なんかもいいかなと思っている。専攻はやっぱり薬学。高等教育に行くと、もっと勉強ができるし友だちもたくさんできる。より高い職業を得ることもできると思う。両親も、よりいい仕事に就くことができると言っている。

万が一、大学に入ることができなければ、私立カレッジに行くことになると思う（筆者が、「仮にSTPM後大学に行くことができなかつたら、20歳ぐらいで私立カレッジに入り、3年か4年を過ごすことになる。随分年齢が上になるが」と言う）そんな風にはあまり考えたことがなかった。（マレー人はもっと早い内に大学に入って卒業してディグリーを取る現実をどう思うかと聞くと）それはもう仕方がないと言うか、変えることができない現実だ。

《生涯設計》

結婚は27歳か28歳ぐらいでしたい。それまでは仕事の方が大事だと思うから、それぐらいの年齢（で結婚するの）がいい。相手はいい仕事に就いていること、つまり自分と同じぐらいの仕事に就くか、自分よりも少し地位の高い仕事に就いていることが望ましい。それと自分をおかしくなくて、ふるまいがきちんとしていることも大事。お酒を飲んだりタバコを吸ったり、ギャンブルをするような人は嫌。子どもは1人いれば十分。多くても2人。仕事に差し支えるから。

Hさんは、第2次調査時から公立大学に進学を希望することには変化がない。ただし、第2次調査当時に最難関校であるマラヤ大学のみを希望していたが、第3次調査時にはマレーシア理科大学も候補の1つとして挙げるようになっていた。Hさんは、第2次調査時から、フォーム・シックスに進学することも想定していたと思われるが、周囲の華人の友人たち（後述する受容葛藤型3人）が、華人でありながら続々とマトリキュレーションに進学していく様子を目の当たりにした時に、「華人だから仕方がない・・・」と思うことができず困惑したのではないだろうか。それゆえ、Hさんにとって、エスニシティ要因や経済的要因が強く進路形成に作用しており、それらの影響によって、華人の他の誰よりも将来の進路について不安を抱えていると言える。特に、フォーム・シックスを修了した後に、大学に進学することができるかどうかについて考えると、いてもたってもいられないようである。

(3) 華人女性の受容葛藤型

最後は、ペイ・ユエンの理系クラスで、華人で最も学業達成度の高い女性に見られる「受容葛藤型」である。他の華人同様に男女平等と考え、固定的性役割観を守ることには反対

である。マトリキュレーションという華人としては獲得しがたい機会を得て、公立大学への進学の可能性を大きく広げたにもかかわらず、華人としてはあまり前例のない進路を選んだために、少々戸惑いを見せる面もある。

以下では、受容葛藤型の3人の事例を挙げることにする。

①華人女性受容葛藤型Jさん

華人女性の受容葛藤型であるJさん¹⁴は、1985年にカンパーで生まれた。北京語を教える学校であるため、初等学校から中等学校までペイ・ユエンに通った。第2次・第3次調査を通じて、将来への展望を明確に示しており、その展望に沿って、マトリキュレーションを経て公立大学に進学するという「エリート・コース」を着実に進んできた。

【第2次調査（2002年8月22日）】

《進路展望》

北京語を教えている学校なので、この中等学校を選んだ。SPMの成績が優秀な10%の非マレー人が、マトリキュレーションに入ることができるようになったので、できることなら入りたい。その後は、医者か先生になりたい。子どもに対して教えることに興味を持っているから。最近、あまり先生になりたがる若い人は多くない。大学卒業後、本人が望む職業機会を得ることができなかった場合に、仕方なく教師になる卒業生が多いけれど（自分は先生にも興味がある）。進路に関する情報は、家族が購読している「中国報」か「The Star」から収集することが多い。

《性役割観》

夫や父親になるために、教育は関係ない。同様に妻や母親になるためにではなく、自分の場合は自分の興味で選ぶ。（主婦になって）テレビを見たり、料理したりするのだけではつまらない。一般的に、このような考え方（性別役割観）は昔の話に過ぎず、現在自分たちの世代ではこういう考え方は随分減っている。

《リーダーシップ》

身体的には、男性が女性に勝っているのは変えることができない事実だと思う。恋愛している時は別だけれど、考え方の面でも、女性は夢見がち（romantic）で、男性は現実的だと思う。だから、仕事する時など男性がリーダーシップを執るとよい。家ではしっかりとしたリーダーシップを發揮できるような夫を、自分も選びたい。でも、その他の場面では男女の差なく、力のある人が指導者になればいいと思う。

《職業観》

医者を観察する機会があったが、性別にかかわらず働くことができるという印象を受けた。教師を選んだのは、女性の方がより他人の世話をする（sayang）能力に長けているし、より我慢強い（patient）と思うからだ。男性が教師になると、給料が必ずしも高くないので、家族を養うのには足りないだろうが、女性の場合は、（通常半日

で仕事が終わるので) 家族の世話をすることができるので、女性に適していると言える。会計係あるいは会計士は、お金を取り扱うことに女性の方が適している。例えば、家族で家計を預かるのは通常女性であることから想像できる。

《性差別》

5人兄弟(姉・兄・Jさん・妹・弟)の3番目だが、母親の愛情は兄や弟に向かうことが多い。おそらく、将来兄弟の方が両親の面倒を見ることになるからだろう。母親の態度を父親が時々責めることがある。華人コミュニティでは、一般的に男の子に愛情をそそぐ場合が多いように思う。特に祖父母の世代ではそれが顕著であった。

Jさんは、SPMの成績が大変優秀であったため(10A)、希望通りにマトリキュレーションに進学することができた。ただし、マレー人に優先的に供与される奨学金は、希望通りに獲得できなかった。それでも、「10%の非マレー人が、マトリキュレーションに通うことができるようになっただけでも進歩だと思う。少しだけ」と述べる。このように現実を冷静に受け止めていられるのは、華人にはまれな機会を得た誇り故であろうか。

また、Jさんは、生徒の大半が華人である学校に、初等教育段階から中等教育段階まで通っていたため、「90%がマレー人で、10%が非マレー人」で構成されるマトリキュレーションで、初めてマレー人と一緒に学ぶようになった。入学当初こそ「マレー語のスラングが分からないこともあってとまどった」が、「今は特に問題なくうまくやって」いるそうである。

どの質問に関してもしっかりとした意見を持っているJさんであるが、男女の役割や差別に対して能力があれば克服できるという考えを持つ一方で、身近な家族から「女の子だから…」と活動を制限されることもあったと言う。

第2次調査時には、将来はマラヤ大学の医学部に入り医者になることと教員になることを志望していた。医者という職業を「男女とも適している(と対象者が考える)」職業としてとらえる一方、教師という職業を「女性に合う」職業としてとらえていた。どちらを選ぶかで少々迷っているが、明確な進路展望を有していた。このような進路展望は、第3次調査時にも維持できているであろうか。

【第3次調査(2004年1月16日)】

第3次調査時に先立ち、携帯電話のショートメールサービス(SMS)でやりとりをした後に、再びJさんに会うことになる。後述する受容葛藤型の友人2人とともに、カンパー

のファスト・フード店で、土曜日 14 時に待ち合わせした。平日にマトリキュレーションで過ごしてから、土曜日に一時的に帰宅する時刻である。J さんの、現在の進路やマレー人との生活に関する面接の結果は以下の通りである。

《進路の現実》

SPM試験では 10Aを取ったので、今通っているマトリキュレーションの他にも幾つかの選択肢があった。たとえば、UTP（ペトロナス工科大学）やフォーム・シックスなど。

JPA (Jabatan Perkhidmatan Awam) という奨学金にも応募したが、これはマレー人が優先なので 10Aをとっただけでは（奨学金を得ることは）駄目だった。（マレー人が優先的なことについてどう思うかと聞くと）以前に比べて 10%の非マレー人がマトリキュレーションに通うことができるようになっただけでも進歩だと思う。少しだけ。

朝 7 時に起きて、授業に行く。授業はお昼まであり、1 時くらいには昼ごはんを食べる。それから夕方までまた授業があり、5 時頃にシャワーを浴びてから 6 時にご飯を食べる。その後また勉強し 12 時くらいには寝る。

《マレー人との生活》

これまでペイ・ユエンで華人だけしかいなかったのが、マトリキュレーションで初めてマレー人などと一緒にになった。90%がマレー人で、10%非マレー人。ゴペンのマトリキュレーションではできるだけ、全て（のエスニシティを）一緒にしようと試みている。最初は、マレー人の言葉のスラングが分からないこともあってとまどうこともあった。でも今は特に問題なくうまくやっている。友好的な人が大半だが、ごく少数は全く非マレー人を好まない人もいる。

《マレーシア社会の男女差》

（以前男性が現実的で、女性が夢見がちだと言っていたと聞くと）ほとんどの人がそうだと思う。でもインドネシアやフィリピンなど、女性が大統領になっている国もあるから、いつかマレーシアでもすごく才能のある人が出れば、女性もリーダーになることもあるだろうな。でも、今のところ、マレー人とか華人とか関係なく、インド人は友だちがいなくて分からないけれど、政治の分野で女性が活躍するには、マレーシアではまだ難しいと思う。

SPM で大変優秀な成績を収めた J さんであるが、マレー人が優先的に取得できる奨学金は獲得できなかった。だが、様々な選択肢の中からマトリキュレーションを選ぶことができた。若干の制約はありながらも、華人がなかなか獲得できないマトリキュレーションへの進学機会を希望通り得られたことを喜んでいる一方、慣れないマレー人との生活に戸惑いを覚え、将来への不安も幾らか抱えているという具合に、現状を受容したり葛藤したりしている。

第 3 次調査時の、進路展望はどのようなものであろうか。

《進路展望》

将来は、UMかUKM、USMに行きたい。一番行きたいのはUM。できれば医学部に入りたい。高等教育を受けることのメリットは、あんまり考えたことがなかったが…、(少し考えてから) 職業面で有利になる点と、他人から尊敬される点などがある。でも高等教育を受けなかったとしても(あまり関係なく、成功するかどうかは) チャンスの差によると思う。

将来は医者になりたい。でも、長い時間をかけてなれなかったらと思うと怖い。教師になることにも興味があるので、マトリキュレーションが終わってから、非常勤の教師に挑戦してみようと思っている。姉が同じように非常勤の教師を経験していて、生徒と別れる時にいろいろ記念品をもらったのを見た。子どもたちがとてもかわいいので、私も経験したいと思うようになった。たしかに教師は給料もあまり高くないし、最近の子どもは教師という職業を少し見下すところがあるけれど、おもしろい職業だと思う。

医者になるには、19歳から5年の時間がかかる。3年目には実習に行く。薬剤師になるという道もある。薬剤師の方が、医者よりもプレッシャーが少ない。もし公立(政府の) 病院に勤めたら、医者と薬剤師の給料の差は、わずか200RMで、医者でも1ヶ月2000RM強の給料しかももらえないそう。そう考えると薬剤師も悪くない。これもスター(新聞)に書いていた。

両親は自分の好きなようにしていいと言ってくれる。両親の教育レベルがあまり高くないので、あんまり具体的に協力してくれるということはないが、医者になることにあんまり心配しすぎないようにと勇気付け励ましてくれる。友だちとは将来の夢を語り合うことがある。

Jさんは、第2次調査時の希望通り、マトリキュレーションに進学していた。そして、高等教育を卒業した後に医者や教師を志すという進路展望にも変化は見られなかった。ところが、医者や教師以外の間に位置づく、より現実的な進路も想定するようにもなっている。また、Jさんにとって、進路選択する際には、両親の助言や友人の励ましがとても大切であり、進路や将来に関する情報の多くは新聞からも得ている。今後の生涯設計については次のように述べた。

《生涯設計》

結婚は…27歳から28歳、少なくとも30歳ぐらいにはしたいと思っている。以前、32歳以上で子どもを生むのは体によくないと書いた論文を、スター新聞で読んだことがある。それを信じると結婚は30歳ぐらいまでにはしたいかな、と思う。医者の仕事が、出産や子育ての休暇があればいいけれど(「あると思う」と勝手な助言をしてしまった) 子どもは3人か4人、男の子か女の子は気にしない。

家庭でのリーダーシップは、夫か自分かどちらがとるというのではなく、常に議論をしていきたい。夫は、好きなものが一緒に、趣味が似ていて、私を愛してくれて、子どもの世話をしてくれる人がいい。仕事と教育(のレベル)が両方自分と同じぐらいだといいい。

Jさんは、家庭におけるリーダーシップや結婚などの生涯設計に関しても、明確な意見

を持っている。性役割観に対して反対するというよりは、ある程度認めた上で女性の可能性も主張していると言える。

以上のことから、Jさんにとって、進学阻害要因として作用する要因はエスニシティ要因と言える。しかしながら、マレー人が多いマトリキュレーションの機会を得たことから、先の華人受容型、華人葛藤型ほどにエスニシティ要因がネガティブには作用しない。成績優秀で、将来に様々な可能性を持っているJさんであるが、マレー人と同じ教育機会を得たことへの戸惑いも隠せない。こうした複雑な感情を持つゆえに、受容葛藤型であると言える。

②華人女性受容葛藤型Kさん

続いて、華人女性の受容葛藤型であるKさん¹⁵のケースについてである。

Kさんは、ペイ・ユエン中等学校があるカンパーで生まれ、カンパーから車で15分ほどのところにあるアエー・クニン (Air Kuning) で育った。アエー・クニンの初等学校に通ったが、華人は華語を学ぶべきだという親の考えにより、中等学校からはペイ・ユエンに進学した。Kさん自身は、今後英語が国際言語として高い価値を持ち、職業機会の広がりにも寄与すると認識している、また、「もし親が英語を重要視していたら、近くのエソジスト ACS という中等学校に進学するという選択肢もあったらうな」と振り返る。

【第2次調査 (2002年8月22日)】

《進路展望》

北京語を学ぶことができるので、現在の中等学校を選んだ。卒業後は、できることなら、シンガポールに留学したいと思っている。その後、薬剤師になりたい。(女性に適した職業として選んでもいい) 将来について父や母と話すことがあるが、彼・彼女は知り合いの成功談を話す。

《性役割観》

自分が夫として選ぶのであれば、自分と同じように高等教育を受けた男性の方がいい。自分と同等であってほしい。若い世代は、力があれば家庭だけでなく外で働くことも問題にはならないので、性別役割観には全く賛成しない。

《リーダーシップ》

男性か女性かということよりも、その人の能力を見る必要がある。

《性差別》

家庭で「時々差別がある」を選んだのは、自分の弟の方に教育のみならずあらゆる活

動を優遇するから。華人の老人 (orang tua) は、「女の子は、教育を受ける必要がない」と言うことが多い。

第2次調査中、マレー語があまり得意ではないからか会話の途中で中国語が混じり意思疎通ができないこともあり、終始緊張した面持ちであった。また、家庭において男子と女子とで差別があるが、本人は性役割観を強く否定している。将来は、シンガポールに留学することを希望していたが、第3次調査時にはどのような進路に進んでいるであろうか。

【第3次調査 (2004年1月16日)】

筆者は、第2次面接調査に「人見知りするタイプ」のKさんとの面接がスムーズに進行しなかったことを覚えているため、「今回は2回目だから少しリラックスして話せるといいな」と申し出ると、Kさんは少し笑ってスタートした。まず、Kさんは、現在のマトリキュレーションにおける華人の立場などについて貴重な意見を示してくれた。

《進路の現実》

SPMは9Aをとった。ゴペンの講師が、(マトリキュレーションに行くことができるかどうかは、単に) Aの数だけではなくて、どこに住まいがあるかということが重要視され、とりわけ農村地区に住んでいる人は優先されると言っていた。17歳の時SPMを受け、18歳でマトリキュレーションに入った。本当は(中等教育修了後に)3つの選択肢があったが、マトリキュレーションに行くことを選んだ。

毎朝7時30分に起き、7時40分に朝ごはんを食べ、8時にクラスに行く。12時から2時の間にご飯を食べたり少し休憩をしたりする。授業を終え4時頃には寮に帰る。その後5時ぐらいまで少し仮眠をとって、7時に夕飯を食べる。夕飯後は12時ぐらいまでか、遅い時には2時ぐらいまでその日の復習をする。シャワーを浴び床に入るのは深夜を過ぎる。イポーに行くのは、1ヶ月1回程度だ。

ゴペンのマトリキュレーションには、2000人通っているが、その内153人が非マレー人。10%非マレー人が選ばれたが、実際には8%ぐらいしか入学しなかった。入学しなかった人の行き先は定かではないが、たとえば留学などのケース、私立大学に通うケースなどがある。マトリキュレーションの授業料は自分で受領書を持っていたので分かる。入学時に600RM(試験代など含む)払って、第2セメスターには、120RMを払う。ただし、毎セメスター1000RMずつ補助がある。

フォーム・シックスでは2年で終える内容を、マトリキュレーションでは1年で勉強しないとイケないから、なかなか大変。生徒を選抜する大学側が、フォーム・シックスで学ぶことができる科目を好む場合があるので、(大学に進学するのに)一概にマトリキュレーションをいいとは言えない。

先のJさんと同じようにSPMで優秀な成績を収めたKさんであるが、第2次調査時の希

望にしたがってシンガポールに留学するのではなく、実際にはマトリキュレーションに進学していた。マレーシアにおいて、中等学校を修了した後に、マトリキュレーションを経て公立大学に進学する場合と、フォーム・シックスを経て、再度 STPM 試験を受験してから公立大学に進学するという場合とに分けられることは前述した通りである。一般的に、前者はマレー人向けのコースであり、後者は華人やインド人など非マレー人（非ブミプトラ）向けのコースであると言える。ところが、90年代後半からメリトクラティックな考え方が教育政策に反映されるようになり、華人とインド人にも、マトリキュレーションに進学する機会が開かれるようになった。そうして、Kさんは非マレー人であるにもかかわらずマトリキュレーションに進学する資格を得たのである。このようなKさんによるマトリキュレーションの現状に関するコメントから、稀有な機会を得ることができた華人の友人たちの中には別の進路を選んだ者が少なくないことなどが分かる。

続いて、第3次調査時のKさんの進路展望と生涯設計について見てみたい。

《進路展望》

大学はUMの薬学部に行きたい。もし大学に行くことができなければ、教師ぐらいにしかなれないと思う。以前はシンガポールに留学したいと思っていたが、AレベルかSTPMを受けた生徒のほうが、（留学するには）有利なので叶わないだろうと思う。

大学卒業後は、薬剤師になりたい。医者になるには、5年間プラス2年から3年かかるので、長く勉強しないといけないから自信がない。（以前、薬剤師はより女性向の仕事と言っていたと聞くと）たしかに、男性の方が、多く医者になりたがると思う。薬剤師はいろんな人とたくさん話すというよりは、薬と向き合っていればいいだけなので女性にはいい。

（以前、家族の中で弟をかわいがる傾向があると言っていたが）実際には、母親が私を、父親が弟と年の離れた妹をかわいがる。父親は、私が医者か薬剤師になるといいと思っている。母親からそれほど具体的な助言はないが、仕事を持って生活が大変でならないようにできればそれで十分だと思っているみたいだ。

《生涯設計》

28歳から30歳ぐらいで結婚できればいい。出産のことを考えてそう思う。家の中でどちらが主導権を握るかは、結婚前にたくさん話し合っておきたい。どちらがリーダーシップをとってもいいけれど、もし男性が家長になった場合、私のことをできれば尊重してほしい。夫になる人には、あらゆる面でしっかりとした選択をしてほしい。たばことギャンブルはだめ。

第2次調査時には留学を希望していたが、マトリキュレーションにいる第3次調査時には、留学を希望しても、フォーム・シックスから留学する生徒より不利であると認識しており、国内の公立大学を希望するようになった。また、第3次調査に、Kさんはマラヤ大学の

薬学部に進学することを希望するようになっていた。将来は、男性向きの職業である医者ではなくて、女性向きの職業である薬剤師になることを希望している。さらに、出産の年齢を考えて、20代の後半で結婚したいと考えている。Kさんの親は、Kさんの進路に対して細かい希望を言わないが、十分に生活できるような職業に就いてもらいたいと考えているようである¹⁶。

華人アイデンティティを重んじる家に育ち、国民型学校で華語（北京語）による教育を受けてきたことが影響しているのか、固定的性役割観には反対しながら、男女の役割は異なっているという趣旨の発言もあることから、Kさんの進路形成には、ジェンダー要因がある程度作用していると言える。また、マトリキュレーションという新しく華人に開かれた教育機会を得られたことに満足しつつ、幾らかの不安も感じている。それ以外の他の要因は強い影響を及ぼしていないと言える。

③華人女性受容葛藤型Lさん

受容葛藤型の3番目の事例として、Lさん¹⁷の事例を挙げる。

Lさんは、カンパーで生まれた。カンパーの中心部にあるバスステーションから、バスで10分ぐらいのカンポン（村）に家があり、「兄や姉が既に通っていた」という理由で、初等学校からペイ・ユエンに通うことになった。家の宗教は、道教であり、お祈りは1日に3回欠かさない。お祈りの方法は仏教と似通っているため見分けをつけるのは難しいが、道教は菜食主義ではなく肉も食べることができるそうである。Lさんによると、道教の教えは、「ただ、どうすれば人がよくなるかということだけを述べるだけで、男女の関係についてはあんまり何も言っていない」。

以下では、Lさんの第2次調査時の回答について示すこととする。

【第2次調査（2002年8月22日）】

《進路展望》

家族の意見で、北京語を教える学校なのでこの学校を選んだ。もし可能であれば、オーストラリアに留学したいと思っている。ただ、家族はコストがかかることを心配している。理科の中でも科学が好きなので、理学部を選びたい。でも、大学卒業後は社会でニーズが高まっているスチュワーデスにもなりたい。

友達と進路に関して話すことが多い。家族だと進路に関して命令されてしまうから友達の方がいい。

《性役割観》

男性は、高等教育まで勉強を続ける方がいい。卒業後すぐに就職するよりは、女性も高等教育まで勉強を続ける方が重要だと思う。その理由は、女性も「独立」する必要があるからだ。女性も主婦だけではなく、家の外の人と交流することが大切だと思う。もちろん台所で家事をするのも女性の仕事としていいと思うが、もし本人が望むなら (suka-hati)、男性も女性も外で働くことが可能だと思う。

《リーダーシップ》

権力を持つ力 (kuasa) を持っているから、男性の方が女性よりもリーダーシップをとるのに適している。でも、もし望まれるなら会社で自分がリーダーシップを発揮してもいいと思う。

《性差別》

華人コミュニティの間では、特に上の世代 (golongan tua) が男女の差別をする傾向にある。

マラヤ大学に在籍している兄が、L さんのロール・モデルになっているようであるが、第2次調査時に、本人はオーストラリア留学を希望していた。家庭外でも女性が能力を発揮することができると考えており、L さん自身もリーダーシップをとることを厭わない。ただし、できる限りリーダーシップは男性がとるべきだとも考えている。第2次調査時に L さんは、エスニック集団別にも性別にも進路選択する上での制約を感じてはないようであったが、第3次調査では、どのように変化しているであろうか。

【第3次調査 (2004年1月16日)】

第3次調査において、交渉葛藤型の3人に面接を実施するために、L さんが携帯電話を活用してアレンジをしてくれた。L さんは、第2次調査の際には、華人に典型的な進路の一つである留学を希望していたが、現在はどのような進路をたどりどのような将来の展望を抱いているだろうか。

《進路の現実》

SPMは6Aをとった。 (筆者はAの少なさにとても驚いてしまい一時言葉を失う。気を取り直し、どの教科でAをとったかを聞くと) 数学・応用数学・科学・物理・マレーシア語・モラル教育の5つ。Aをとるためには、だいたい70%得点しなければいけないと言われている。6Aでもマトリキュレーションに入ることができたのは、農村地区 (luar Bandar) に住んでいるからだと思っている。

毎日7時に起き8時には学校に行く。午前の授業の後12時30分に昼ご飯を食べてまた授業を受ける。午後の授業の後には、5時ごろにシャワーを浴び、6時に晩御飯を食べる。遅い時には、夜中の2時ぐらいまで復習をする。

華人が 10%ほどマトリキュレーションに入ることができるようになった新しい制度を幸運だと思う反面、友だち（華人）の多いフォーム・シックスでなくて、マレー人が多いマトリキュレーションに入ることになった自分を不運だとも思う。

Lさんは、第2次調査時にはオーストラリアへの留学を希望していたが、第3次調査時にはマトリキュレーションに進学していた。留学という当初の希望と現実が異なることに対して強く葛藤する様子は見せないが、経済的理由などから留学することは実現困難であったと推測できる。先の受容葛藤型の2人の例と比べて、LさんのSPMの結果は必ずしも優秀であるとは言えなかった。それにもかかわらず、主要科目でAを取得したことと、農村地区に居住していること等が考慮され、マトリキュレーションに進学したと考えられる。Lさんは、マトリキュレーションに進学することができたことについては、「幸運であるとともに不運でもある」と自己評価している。

Lさんは、マトリキュレーションを修了した後の進路についてどのように考えているのであろう。今後の進路展望と生涯設計について見てみたい。

《進路展望》

大学はUMに行きたい。生物が好きなので薬学部に行こうと思っているが、まだ（具体的には）あまり固まっていない。以前シンガポールに留学したいと思っていたが、英語ができないので今は難しいと思っている。大学に入るとより高い仕事に就くことができるということ以外に大学に入ることの意味について考えたことはない。

《生涯設計》

医者は責任がとても大きい（職業な）のでなりたくない。前はスチュワーデスになりたいと思っていた。でも将来の仕事について、まだほとんど考えたことはない。スチュワーデスはなれるなら今でもなりたい。

26歳か27歳で結婚したいと思う。自分と地位が同じぐらいで、やさしくて、自分自身を高めることができる人（majukan diri sendiri）がいい。

家庭でのリーダーはどちらもなることができるが、社会でのリーダーは男性の方が勝っていることが多いので、女性がなるのはまだまだ難しいと思う。

子どもは、男の子1人と女の子2人の計3人ほしい。女の子の方が、自分が女の子なので理解しやすい。自分の兄弟も兄が1人と姉が1人いて、私の理想と同じ。（比較的）父親が姉をかわいがって母親が兄をかわいがる。（それぞれ）多分1番目の子どもだから（かわいがるの）だと思う。（でも）自分のことも末っ子だからかわいがってくれる。

（以前華人の間では、男の子をより大事にする傾向があると言っていたが）多分、文化的な伝統（warisan）によるだろう。自分も男の子を大事にするには賛成する。多分キリスト教の家庭だったらあんまり男の子と女の子の差はないと思うが。クラスには5人ぐらいキリスト教の子がいた。でも、あんまり宗教的なことと、男の子を大事にすることと関係ないと思う。

Lさんは、華人の家族は男子を大事にする傾向があると考えており、Lさん自身も男性のリーダーシップを強く支持し性役割観にも賛成している。そのため、より女性らしい職業に就くことが念頭にはあるが、将来希望する職業を必ずしも明確化していない。進路展望や目的意識も定まっていないのは、上述した受容葛藤型の2人（Jさん、Kさん）とは異なる点である。このように、華人の中でも優秀な成績を取得した上記2人の事例と、成績だけでなく、居住地による選抜でマトリキュレーションの機会を得たLさんの事例とは若干異なっている。Lさんの事例はむしろマレー人の事例に類似している側面があり、目的意識、学習意欲などにも他の華人の事例とは異なっていた。

以上の3つの事例は、第2次調査時（2002年）に、最も成績のよい理系1クラスに在籍しており、第3次調査時（2004年）にはマトリキュレーションに進学していた華人受容葛藤型の事例である。第1次・第2次調査の時点では、第3次調査の目的として、フォーム・シックスや私立大学・カレッジなど、華人にとって典型とされる進路（トラック）に進学した調査対象から、いかに華人が葛藤しているかということ明らかにすることを想定していた。しかしながら、第3次調査の対象に、マトリキュレーションに進学した華人女性を加えることとしたのは、政府により新しい施策が導入され、それ以前は例外とも言えた、非マレー人でマトリキュレーションに進学する事例が増加していることを、調査の途中で知ったからである。

これによって、従来華人女性自身が自発的に選択しているかのように見えていた華人特有の進路は、政策によって配分される教育機会を半ばあきらめながら選択していたという側面も否めないことが分かる。換言すれば、先行研究においては、マレー人と華人の中等学校修了後の進路が、あたかもそれぞれの選好に基づく「エスニック・トラック」であるかのように説明されてきたが、メリトクラティックな政策の導入によって、エスニック集団別のトラックの境界線が崩れた時に、エスニック・トラックの根拠を説明することが困難になる。つまり、従来「マレー人らしい」進路とみなされてきた進路は、「華人らしい」進路にもなりうる可能性を有するのである。

第3節 まとめ

本章では、第1次・第2次調査と同一の母集団から対象を選定した第3次追跡調査を通

じて、後期中等学校修了後に、女性自身が現実を選択した進路や予想される将来を、どのように自己同定しているかについて検討することであった。本章における面接調査の質的分析を通じて、マレーシア・ペラ州における青年期女性の進路形成と自己同定について、次の3点を明らかにした。

第1に、後期中等学校の最終学年であるフォーム・ファイブ時に女子生徒が描いていた進路展望と、中等学校修了後に青年期の女性が実際に選ぶこととなった進路とにギャップがあるという点、第2に、ギャップを生じさせる要因は、エスニシティ要因、ジェンダー要因、経済的要因などのノン・メリトクラティックな要因と、学業成績などのメリトクラティックな要因とが混在しているという点である。第3に、それら様々な要因の影響によって、フォーム・ファイブ時に抱いていた希望と現実とにギャップがある（ない）ことに対して、女性自身の受容や葛藤のありようも異なるという点である。以下では、上記の3点についてより詳細に説明することとする。

第1に、フォーム・ファイブ時に女子生徒が描いていた進路展望と、中等学校修了から1年半程度経った時点で、女性が実際に歩んでいた進路には相違が見られた。調査対象者の女性の中には、経済的要因により選択可能な進路の幅が狭められてしまったために、フォーム・ファイブ時の希望通りに進路を選ぶことができない女性もいた。殊に、下層のマレー人女性（葛藤型）には、第2次調査時に抱いていた希望と、第3次調査時に歩んでいた進路とにギャップが認められた。そして、そのギャップが大きければ大きいほど、マレー人（ブミプトラ）として機会が十分に与えられているはずであるにもかかわらず、恵まれた機会を十分に活用できなかったことに葛藤を伴っていた。それに対して、華人女性は、マレー人女性ほどに機会が与えられていない現実に葛藤する者（葛藤型）もいれば、フォーム・ファイブ時から華人特有の進路を目指してきたために、第3次調査時点で、理想と現実との隔たりがさほど小さくなく現実を受け入れているかに見える者（受容型）もいた。

第2に、女性の進路形成に影響を及ぼす要因は多様であった。特に、属するエスニック集団で異なる「エスニシティ要因」、固定的性役割観に対する意識や態度などで異なる「ジェンダー要因」、階層間で異なる「経済的要因」という3つの要因が大きな影響を及ぼしていた。これら3つの要因の影響は、エスニック集団や階層に応じて多様であった。たとえば、進路形成過程において、マレー人女性はジェンダー要因や経済的要因の影響を受けやすく、華人女性はエスニシティ要因や経済的要因などの影響を受けやすかった。また、属するエスニック集団にかかわらず、より低い階層の女性の方が、より高い階層の女性より

も葛藤を誘引する要因が数多く存在していた。さらに、本章では、前章でキー概念としてきた性役割観をジェンダー要因とし、エスニシティ要因や経済的要因などの他の要因と相対化した。その結果、伝達されてきた性役割観に従い進路形成するのは、マレー人女性の下層（葛藤型）と中間層（受容型）であるのに対して、全ての階層の華人女性が、両親や祖父母が継承してきた「伝統的」かつ固定的性役割観を受け継ぐことに反対の意思を示しつつ進路形成していた。つまり、ジェンダー要因が進路形成に及ぼす影響は、エスニック集団間あるいは階層間で異なると言える。

第3に、希望していた進路と実際の進路（のギャップ）に対する女性の自己同定のあり方は多種多様であり、5つの型に分類できた（表5-1、図5-1）。先行研究にならいエスニシティの観点から女性の進路形成について見ると、マレー人女性に対するエスニシティ要因はポジティブな影響を及ぼす場合が多く、華人女性にはネガティブな影響を及ぼす場合が多い。そのため、華人女性の方が、進路分化に対してより強く葛藤すると考えられた。しかしながら、経済的要因の影響を加味すると、マレー人女性の中でも、優秀な成績を収めたが故に、選ぶべき分野が限定されてしまうマレー人女性（受容型）がいる一方、マレー人という属性によれば十分な選択肢が用意されているにもかかわらず、経済的要因により自ら希望する進路を選択できないマレー人女性（葛藤型）もあり、全てのマレー人女性にポジティブな影響がもたらされる訳ではなかった。このように、同じエスニック集団の中でもエスニシティ要因の影響が異なっているのである。殊に下層のマレー人女性に大きな葛藤が見られるという事実は、これまで一枚岩で語られてきたマレー人の進路形成に対するあり方の多様性を教える。

表 5-1 青年期女性の進路形成と自己同定の5類型（マレーシア・ペラ州）

	マレー人女性	華人女性
上層	—	—
中間層	受容型（タッヤ）	受容葛藤型（ペイ・ユエン） 葛藤型（ペイ・ユエン）
下層	葛藤型（マリム・ナワール）	受容型（マリム・ナワール）

出所：調査結果より筆者作成。

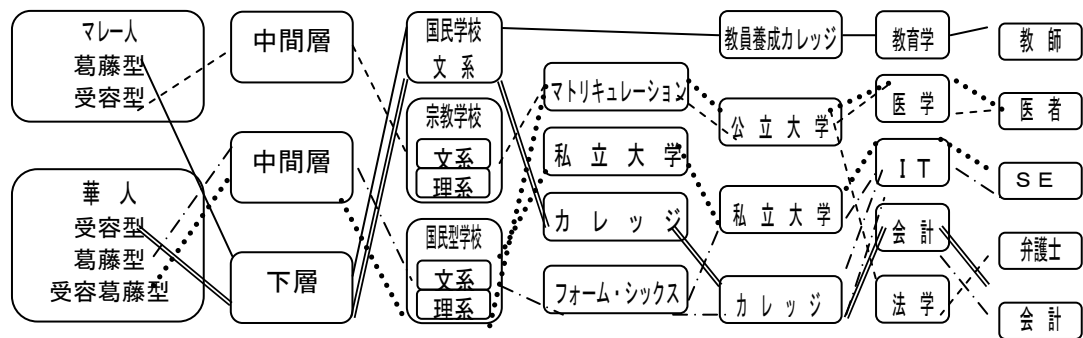


図 5-1 青年期女性の進路形成の5類型 (マレーシア・ペラ州)

出所：調査結果より筆者作成。

一方、華人については、華人特有の進路を選んだ場合や、マレー人特有の進路に華人でありながら進出した場合などは、現実の進路を受容する度合いが強まる。ただし、華人のトラックから外れてマレー人のトラックに進出した華人は、自らの進路形成過程に葛藤も伴う場合も見受けられる。近年華人でも、マレーシア教育証書試験で一定以上の成績を収めた場合に、これまでマレー人に優先的に供与されてきたマトリキュレーションに進学する機会を得られるようになったが(受容葛藤型)、この新しく与えられた「幸運な機会」を手放して喜ぶというよりは、華人の友人が少ない環境に身を置かざるを得ないことに一抹の寂しさを覚えていた。あるいは、マトリキュレーションに進学できても、大学卒業後の職業機会が、属するエスニック集団に関わらず平等に開かれるかどうかについては依然として不透明であるため、マトリキュレーションへの入学を辞退した華人もいたほどである。このように、これまで優先的にマレー人に開かれていたエスニック・トラックに、より多くの華人(非マレー人)が進出できるようになっても葛藤は残されるのである。

加えて、同一エスニック集団の同一階層であっても、各々の要因に対する葛藤が異なっていた。経済的要因に対する葛藤は、下層のマレー人女性(葛藤型)と中間層の華人女性(葛藤型)で強い。その上、ブミプトラ政策によって教育機会が狭められてきたという事実から、エスニシティ要因に強く葛藤するのは、中間層の華人女性(葛藤型)である。それに対して、マトリキュレーションに進学した中間層の華人女性(受容葛藤型)は、エスニシティ要因により被ることとなるネガティブな作用に抗うことなく、限られた範囲内で最善の選択をすることで、現実を受け入れようとしている。このように、同じ中間層の華人女性でも、各々の要因に対する受容と葛藤のありようには相違点が認められる。さらに、

同一のエスニック集団・同一の階層で、同一の自己同定の型であっても、葛藤の度合いが異なってしまう場合もある。その理由の一つとして、親の意識と子どもの意識の相違が挙げられる。進路について親の意識と子どもの意識が異なった際に、面接調査時こそ、上記の3要因が進路形成に影響を及ぼす要因として対象者から挙げられるが、実際には親の意見とは異なる進路を選ばざるを得ないために葛藤している場合もある。

以上のように、程度の差はあっても、あらゆる型のマレー人女性と華人女性が、進路形成に何らかの葛藤を伴っていた。概して、プミプトラ政策等の国家政策の影響下にあつて、「マレー人らしい進路」、「華人らしい進路」や「女性らしい進路」という、各々のエスニック集団別・性別の属性に特有の進路（エスニック・トラックやジェンダー・トラック）を早くから希望している場合には、自らの進路を受容する傾向が強い。しかしながら、それらのトラックから外れた進路を選択した場合には、後期中等学校修了時から1年半を経た後でも強い葛藤が残されることとなった。すなわち、希望していた進路と現実の進路とにギャップがあることに加えて、国家によって規定された「らしさ」の枠（トラック）から外れた進路を選択した時により大きな葛藤を伴うのである。加えて、マレー人女性は階層が上昇するに連れて、現実の進路を受容する傾向が強まるのに対して、華人女性は階層と自己同定との関係が必ずしも一様ではなかった。

もっとも、エスニック集団間格差を是正するという国家的課題が、人材育成策や教育政策に強い影響を及ぼすマレーシアにあつて、華人という属性故に、中等後教育や高等教育の機会が狭められてきた（ている）ことは事実である。そうした事実に対する深層心理の葛藤は、筆者の想像など及ぶべくもない。さらに、多様な女性の進路形成過程の受容や葛藤のありようが、これら5つの型の全てにあてはまるはずもなく、分類し類型化するという手法が持つ限界にも留意し、改めて個別・具体的な事例に目を配ることが今後の課題となる。

このような本調査の限界を踏まえつつ、終章では、実地調査の結果（第3章・第4章、第5章）について、マレーシア国家の社会変動と教育拡大（第2章）の影響と関連付けて分析する。

註

- 1 ただし、各対象者の葛藤の表現方法を解釈する際に留意すべき点もある。マレー人女性が、比較的やわらかくたおやかに感情を表現することを好むのに対し、華人女性は、時に情熱的で激しい表現で語る傾向が強い。本研究では、そうした感情表現の相違について考慮しつつ、受容しているか葛藤しているかについて解釈するよう試みた。
- 2 『多項目 教育心理学辞典』（教育出版、1986年）において、「青年期」は「思春期の身体発達と性的成熟の開始から、大人としての心理的社会的成熟に達するまでの時期。およそ中学生から大学生に相当する年代」と定義付けられ、17歳を境に前・後期の2区分に分けられる。
- 3 マレーシアにおける高等教育の民営化・プライバタイゼーションに関しては、杉本均（2003）に詳しい。
- 4 Aさん、マリム・ナワールのマレー人女性（文系 No. 54 5P1）。マリム・ナワール中等学校フォーム・ファイブ修了後、マラ技術学校職業コース。父は学校の用務員（前期中等教育、母は主婦（非教育）。マリム・ナワール中等学校卒業後、マラ技術学校職業コースに進学。2002年9月4日（於：学校進路相談室）、9月5日（於：対象者の家）、2004年1月8日（於：対象者の家）の3回面接。
- 5 Aさんは、「男子が卒業後勉強を続けないのは、面倒くさがりやであるということと、試験の結果が悪く仕方がないからということの両方が理由。どちらか一方ではない」とも述べていた。
- 6 第2次調査と第3次調査の質問の相違について、Aさんは「もう一応勉強を終えたので、質問がもっと長いスパンのものになった」と感想を述べた。
- 7 Cさん、マリム・ナワールのマレー人女性（理系 No. 8 5Sc2）。マリム・ナワール中等学校フォーム・ファイブ修了後、工場勤務。父は下級公務員（スタンダード・シックス）、母は主婦（非教育）。2002年9月2日（於：学校の進路相談室）、9月4日（於：対象者の家）、2004年1月8日（於：対象者の家）の3回面接。
- 8 Gさん、華人女性（文系 No. 69 5P1）。マリム・ナワール中等学校フォーム・ファイブ修了後、私立カレッジに進学。父は鉄工場労働者（初等教育）、母は主婦（非教育）。2002年9月3日（於：学校の進路指導室）、9月4日（於：対象者の家）、2004年1月10日（於：対象者の家）の3回面接。
- 9 カンパールのホームステイ先からGさんの家までは、マリム・ナワールとカンパール間を行き来するバスで移動する。バスの停留所では、中等学校の男子10数人と女子数人、子ども連れの女性などがおり、カンパール行きのバスを待つ者もいれば、イポー行きのバスを待つ者もいる。カンパールとマリム・ナワールを往復するバスは、一日37本（6時50分～20時）、マリム・ナワールとイポーを往復するバス便は一日5本ずつと、古ぼけた時刻表には記されているが、実際には時刻表に掲載されているほどバスの便数がない模様である。
- 10 第3次調査終了後に、Gさんの両親から間近に迫る華人の旧正月を祝うために再度遊びに来るように言われるが、もう日本に帰らなければいけないからと辞退する。今回のインタビューは、相手の父親、本人ともに猜疑心が強くなっていたことに加えて筆者の体調不良もあり、あまりよい関係が作ることができなかった。
- 11 ペイ・ユエンで、学業成績が最も高いクラスである理系クラス1の生徒は、全41人（男子23人、女子18人）であった。そのクラスのフォーム・ファイブ修了後の進路は、フォーム・シックス24人、マトリキュレーション7人、その他・不明が10人であった。その他の中には、奨学金を授与されシンガポールの大学に進学する生徒や、私立カレッジに進学する生徒がいた（2004年1月、受容葛藤型3人の面接調査より）。
- 12 Hさん、華人女性（理系 No. 29 5Sc1）。ペイ・ユエン中等学校フォーム・ファイブ修了後、スリ・カンパールのフォーム・シックスに進学。父は商売（前期中等教育）、母は無業（スタンダード・シックス）。2002年8月22日（於：学校の進路指導室）と2004年1月15日（於：バス乗り場近く中華カフェ）の2回面接。

-
- 13 円滑に実施できた面接調査の対象者は、1年半を経過しても覚えていることが多い。Hさんはそうではなかったため、第2次調査時の印象がほとんどなかったが、第3次調査では一転してとても話しやすく感じた。また、時間や場所、状況に応じて、相手の回答も随分違うこともあるので、インタビューは回数を重ねることによって、できるだけ相手の真意に迫ることができるということを実感した。また、後述するJさんは、第2次調査で面接したことを覚えていた。既に50人以上とインタビューしてきたが、以前話した記憶がある対象者が少なからずいることに驚いた。
 - 14 Jさん、華人女性（理系 No. 24 5Sc1）。ペイ・ユエン中等学校フォーム・ファイブ修了後、マトリキュレーションに進学。父はトラック運転手（スタンダード・シックス）、母は主婦（前期中等教育）。2002年8月22日（於：進路指導室）、2004年1月16日（於：ファストフード店）の2回面接。
 - 15 Kさん、華人女性（理系 No. 27 5Sc1）。ペイ・ユエン中等学校フォーム・ファイブ修了後、マトリキュレーションに進学。父は自動車販売（前期中等学校）、母は主婦（前期中等学校）。2002年8月22日（於：学校の進路指導室）と2004年1月16日（於：カンパーファストフード店）の2回面接。
 - 16 第2次調査時には筆者の言語能力の不足により、Kさんとの面接を円滑に進めることができなかった。しかしながら、第3次調査時には話しやすく感じた。ゆっくり話すことができたことが嬉しかったので「また話を聞かせてほしい」と伝えると喜んでくれた。
 - 17 Lさん、華人女性（理系 No. 37 5Sc1）。ペイ・ユエン中等学校フォーム・ファイブ修了後、マトリキュレーションに進学。父は労働者（前期中等教育）、母は主婦（前期中等教育）。2002年8月22日（於：学校の進路指導室）、2004年1月16日（於：カンパーファストフード店）の2回面接。